

令和元年度 特別テーマ展関連講座

第1回講座
講義1

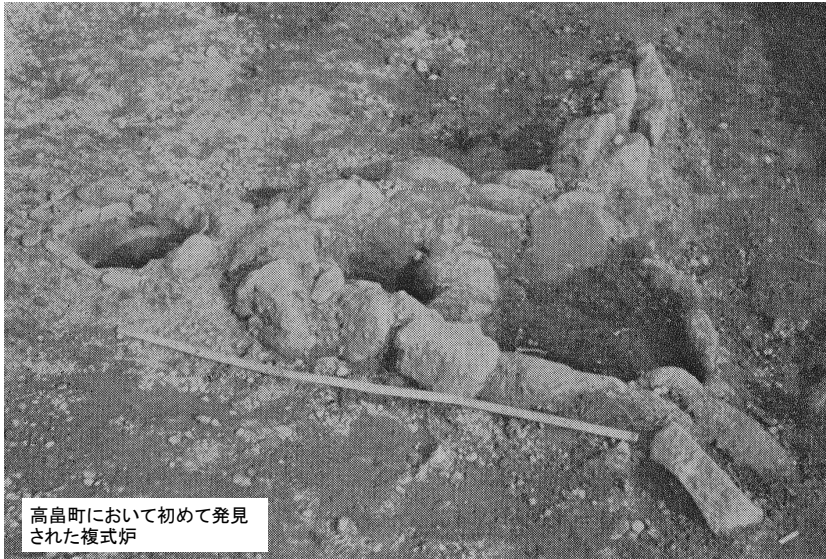
高畠町の縄文時代中期後半の遺跡

井田 秀和氏 高畠町教育委員会

令和元年6月23日(日)

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

高島町の縄文時代中期後葉・末葉の遺跡



高島町において初めて発見された複式炉

高島町教育委員会
井田秀和

◆一の沢遺跡

- ・一の沢岩陰遺跡の所在する一の沢の入り口、一の沢の溪流左岸に位置。
- ・開墾により発見(昭和30年代か)され土器、石器とともに炉跡及び柱穴が検出されている。
- ・炉跡は土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で、平面形二等辺三角形形状、全長1.3m。埋設土器は1個体。この炉跡を中心とする住居跡は、プランが不明瞭であるが概略円形を呈すると考えられる。
- ・出土した遺物は縄文土器、石鏃、石槍、石棒など。

高島町の縄文時代遺跡の概要

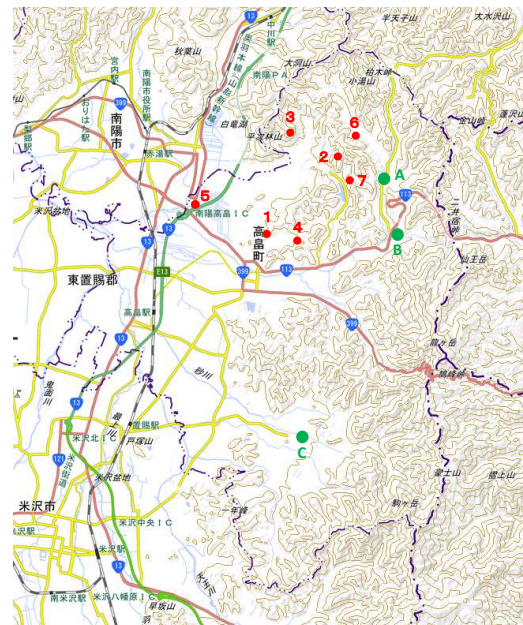
高島町において遺跡が一般に認知されるのは、明治26年(1893)羽山古墳の発見を嚆矢とする。以降、古墳を中心に遺跡や遺物への関心が高まり、郷土史家や考古学愛好者等によって次々に遺跡や遺物が発見・収集されることとなる。

昭和13年(1938)に発行された『東置賜郡史・上巻』には3ヶ所の古墳群と8ヶ所の石器時代遺跡の記載が見られ、戦後柏倉亮吉教授を中心に行われた山形大学による遺跡調査、昭和40年代半ばに始まる高島町史編纂事業、山形県教育委員会内への文化課の設置と詳細分布調査・遺跡台帳の整備、昭和50年代後半以降の高島町教委による分布調査や遺跡地図の作成、昭和63年から平成6年にかけて実施された県下全域を対象とした中世城館址調査等々により、発見された遺跡の数は飛躍的に増大した。

現在、高島町内には縄文時代以降中世まで(一部近世を含む)、およそ320の遺跡が所在する。中でも、低湿地に所在し彩漆土器等の豊富な出土遺物で知られる押出遺跡や、日向洞窟、一の沢岩陰等の縄文時代草創期洞窟岩陰遺跡群は、高島町を代表する遺跡として広く知られており、とりわけ洞窟・岩陰遺跡の多さは、高島町の遺跡の大きな特徴となっている。

◆高島町的主要遺跡(縄文時代)

- 1 日向洞窟 2 一の沢岩陰 3 火箱岩陰
4 大立洞窟 5 押出遺跡 6 尼子岩陰 7 神立洞窟



◎縄文時代中期後半の主要遺跡

- A 宮下遺跡 B 台の畑遺跡 C 金谷A遺跡

高島町の縄文時代中期の遺跡

◆高島町の縄文時代の遺跡

高島町遺跡地図(2000)には309遺跡が掲載されており、その内127遺跡が縄文時代の遺跡(散布地、可能性地を含む)である。

<各地区ごとの遺跡数> 例 3/10⇒縄文時代の遺跡数/地区内遺跡総数

高島地区:38/98 二井宿地区:24/29 屋代地区:14/47 亀岡:3/27 和田地区:45/84

糠野目地区:3/24

各地区合計127遺跡

さらに縄文時代の遺跡の内、中期の遺跡に限定すると次のようになる

高島地区:18 二井宿地区:9 屋代地区:6 亀岡地区:1 和田地区:15 糠野目地区:1

各地区合計50遺跡

またさらに中期後葉・末葉に限定した場合、中期後葉・末葉の遺物がわずかでも出土している遺跡を加えても極めて限られたものとなる。

<各地区の縄文時代中期後葉・末葉の遺跡>

高島地区:一の沢遺跡、一の沢岩陰、ムジナ岩岩陰、鳥取山洞窟、大久保A遺跡

二井宿地区:宮下遺跡、台の畑遺跡

屋代地区:宝沢B遺跡、日向洞窟遺跡・西地区

亀岡地区:なし

和田地区:金谷A遺跡、堂場遺跡

糠野目地区:なし

◎高島町の縄文時代遺跡分布の特徴

町の西半部、平地に所在する亀岡、糠野目の両地区において縄文時代の遺跡(全期間を通していえること)が極端に少ない。これは、遺跡が所在しないというより、まだ発見されていないと考えるのが妥当と判断される。

逆に、山間地に所在する二井宿、和田両地区では縄文時代の遺跡が圧倒的に多い。

中期後葉・末葉に限って言えば、遺跡数も少なく調査事例も少ない。少々以外な結果である。

台の畑(ダイハタ)遺跡の概要

◆屋代川と大滝川の交流点の段丘上に位置

◆段丘状には二井宿小学校が建ち、以前よりグラウンドから縄文土器や石器などが採集されていたが、昭和44年5月に、段丘西端部を貯木場にするため整地した際に多量の遺物が出土し、遺跡として認知される



台の畑遺跡(上空より)

◆昭和58年、二井宿小学校体育館の建設に先立ち実施された発掘調査により以下の成果を得ている

[時期] 縄文時代中期後半～後期前葉

[遺構] 竪穴住居跡6棟、土坑91基、埋設土器3基 他

[遺物] 縄文土器(深鉢、浅鉢、注口土器) 耳飾、円板状土製品 石鏃、石錐、石匙、打製石斧、不定形石器、磨製石斧、磨石、凹石、石皿、石棒など



遺跡近景(北西より)



調査前の除雪状況



調査区近景(正面の山は志田館)

台の畑遺跡の調査 1



面整理(遺構検出)状況



竪穴住居跡の精査状況

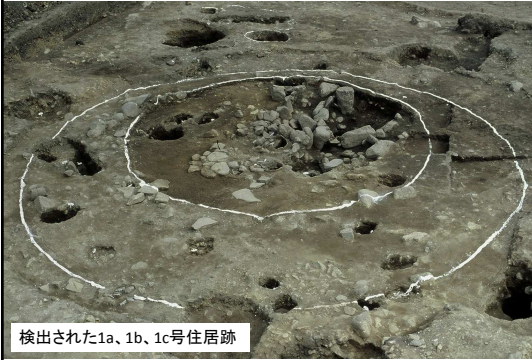


竪穴住居跡内礫出土状況

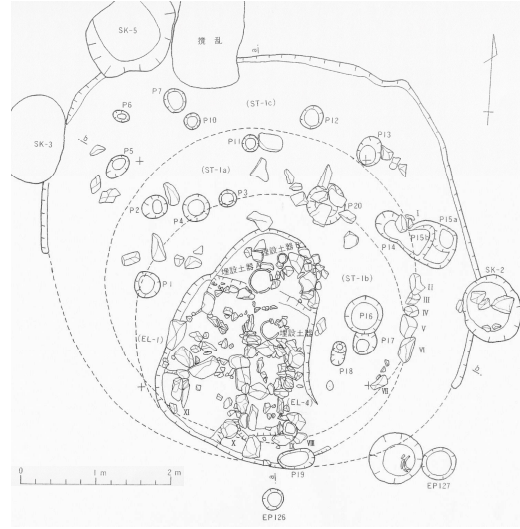


土坑精査状況

台の畑遺跡の調査 2 <1a, 1b, 1c号住居跡>



検出された1a, 1b, 1c号住居跡



◆1a, 1b, 1c号住居跡

遺構上部の大半を失っており、平面形については判然としないが、概ね円形を呈すると思われる。一番外側のプランが1c号住居跡と考えられる。規模は3.6m～6m程を測るものと思われる。

柱穴は1a号住居跡に伴うと考えられるP4、P17、P20以外判然としない。

床面は比較的平坦。

列石 i～xi は、1b号住居跡に伴うと考えられるもので、壁際に土留めと配置されたものか。1b号住居跡の埋設土器を中心として半径2mの円周上に配列される。

1b号住居跡については、1b号住居跡の炉跡である4号炉跡の埋設土器周辺の北半部の床面に見られる扁平な石は、1b号住居跡の想定範囲である直径4mの範囲内にあり、敷石として可能性を持つと考えられる。

1c号住居跡は、1号炉跡及び4号炉跡の直下に新たに発見された6号炉跡の存在により明らかとなったものである。

各住居跡の新旧関係は、炉跡の切り合い等から、(旧)1c号住居跡→1a号住居跡→1b号住居跡(新)となる。

台の畑遺跡の調査 3 <1a号住居跡の炉跡>



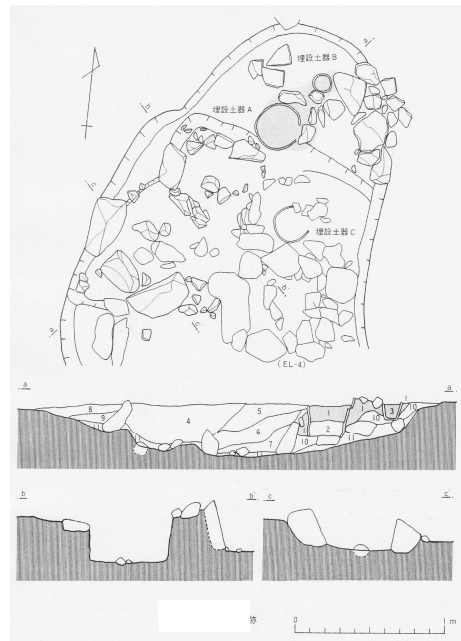
◆1号炉跡

1a号住居跡の炉跡

土器埋設部、石組部Ⅰ、石組部Ⅱからなる複式炉

全長225cm、最大幅は石組部Ⅱで90cm

深さは石組部Ⅰで32cmを測る

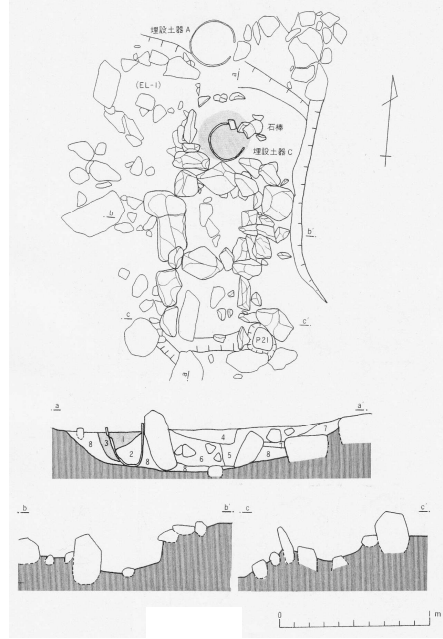


埋置される土器は2個体 正位の状態

埋設土器Aの周囲に石囲いが見られる

石組部Ⅰの東側及び石組部Ⅱの一部を4号炉跡により切られる

台の畑遺跡の調査 4 < 1 b号住居跡の炉跡 >



◆4号炉跡

1b号住居跡の炉跡

土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉

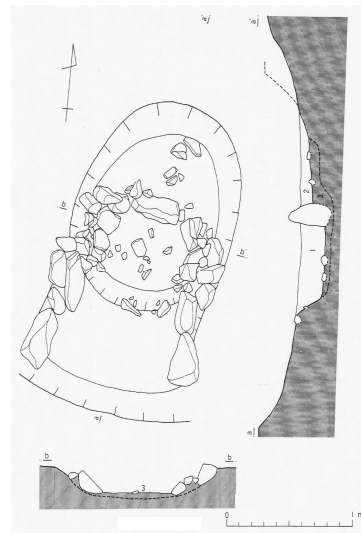
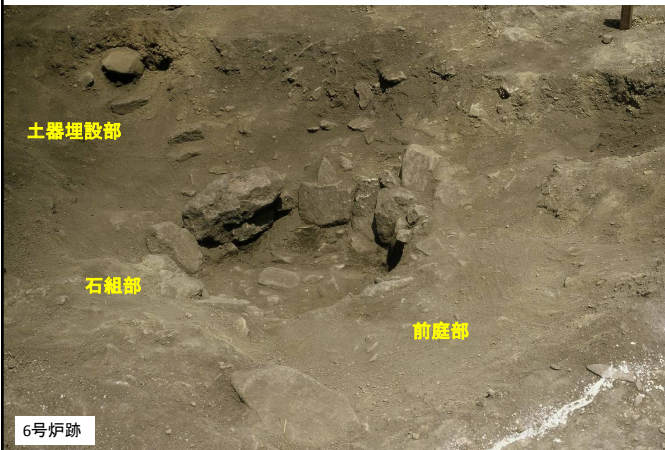
全長170cm、幅は石組部で最大100cm、深さは石組部で25cmを測る

埋置される土器は1個体 正位の状態

埋設土器の周辺には石囲いがあり、その周辺に扁平な石が敷き詰められる

石組部の奥壁、西壁には比較的大きな石が用いられ、石積みは見られない 東壁は小型の石を二～数段積み重ねている 底面に敷石は見られない

台の畑遺跡の調査 5 < 1 c号住居跡の炉跡 >



◆6号炉跡

1c号住居跡の炉跡

1号炉跡、4号炉跡の直下に所在

土器埋設部及び石組部、前庭部の上半部は失われている

確認した炉跡掘り方の長さは250cm、本来は280cm前後と推定される

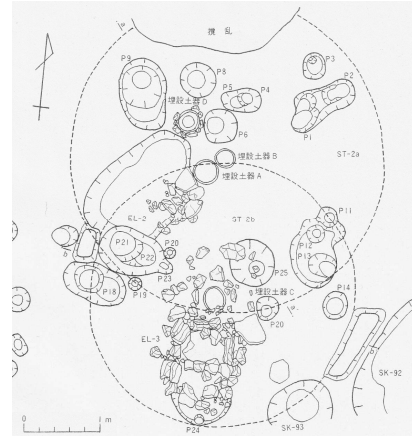
前庭部の袖石が本遺跡では唯一若干開き気味となるが、他の炉跡同様ほぼ平行であり、石組部から前庭部の平面形は短冊形となる

本調査においては最大の炉跡

台の畑遺跡の調査 6 <2a, 2b号住居跡>



検出された2a、2b号住居跡



◆2a、2b号住居跡

1号住居跡群同様、遺構上部の大半を失っており、平面形については判然としないが、概ね円形を呈すると思われる。北側が2a号住居跡、南側が2b号住居跡である。規模はそれぞれ径約4m前後を測るものと思われる。

P3、P9、P25が2a号住居跡の柱穴と考えられるが、2b号住居跡の柱穴は不明。

壁については、2b号住居跡に伴うと考えられる壁が東西方向に部分的に認められる以外は確認できなかった。床面は比較的平坦。

各住居跡の新旧関係は、炉跡の埋設土器や出土遺物等から、(旧)2a号住居跡→2b号住居跡(新)となるが、2a号住居跡の2号炉跡にはさらにもう1基の炉跡が存在したと考えられ、もう1棟の住居跡が存在した可能性が高い。

台の畑遺跡の調査 7 <2a号住居跡の炉跡>



検出された1、4号炉跡

◆2号炉跡

2a号住居跡の炉跡

土器埋設部、石組部(＋前庭部)からなる複式炉 ※石組部北西半、前庭部欠失
確認される全長170cm、幅は石組部・前庭部が破損しているため不明

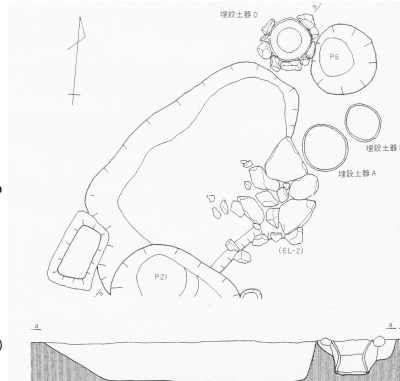
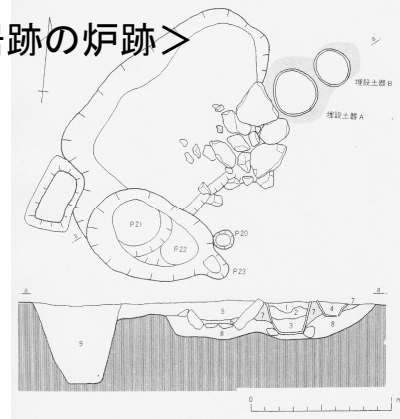
石組部は断面形浅鉢形を呈する 本遺跡の他の炉跡は断面形箱形を呈しており、唯一異なる埋置される土器は2個体 正位の状態

本炉跡は、北西半部を土坑状の落ち込みにより切られる

◆埋設土器Cを中心とする炉跡

2号炉跡を切って構築される炉跡 ※埋設土器のみ残存、石組み等は抜き取られたか

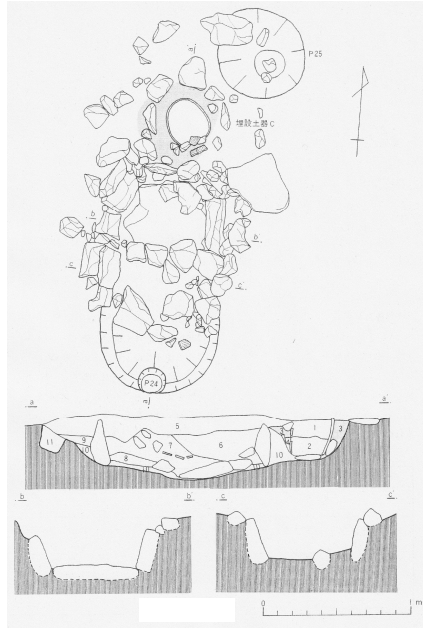
2号炉跡との切り合いから、(旧)2a号住居跡→埋設土器Cを中心とする炉を有する住居跡(新)の新旧関係が想定される



台の畑遺跡の調査 8 < 2b号住居跡の炉跡 >



3号炉跡



◆ 3号炉跡

2b号住居跡の炉跡

土器埋設部、石組部Ⅰ、石組部Ⅱからなる複式炉

全長193cm、幅は石組部Ⅰで106cm、深さは38cmを測る

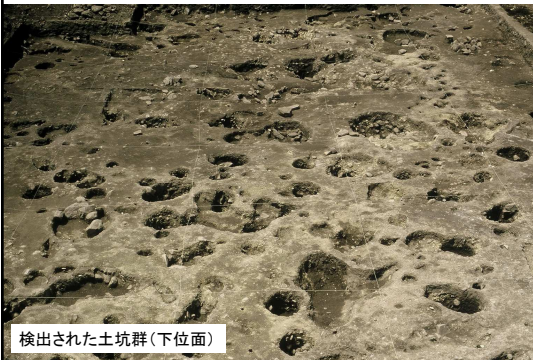
埋置される土器は1個体 口縁部を下にした逆位の状態

埋設土器の周辺には石囲い、石組部Ⅰ底面には大きな敷石が見られる

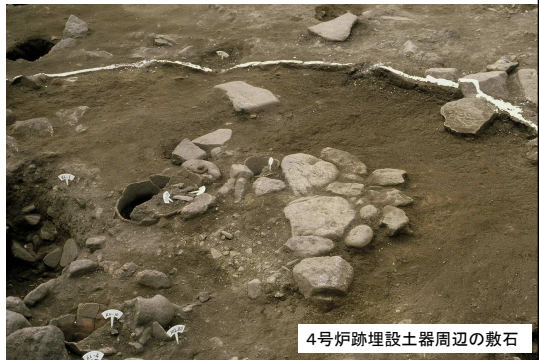
形態的には1b号住居跡の4号炉跡と極めて類似している

他の遺構(とりわけ炉跡)との重複、切り合いがなく、ほぼ完全な形で検出された唯一の炉跡

台の畑遺跡の調査 9 < 土坑、集石遺構等 >



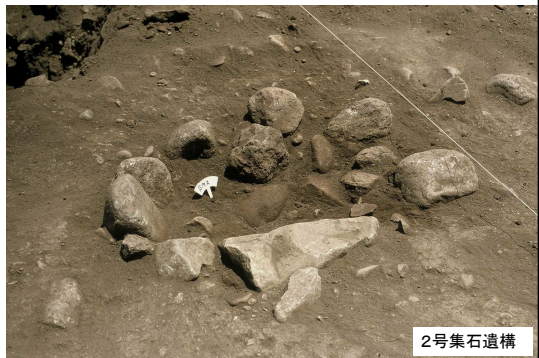
検出された土坑群(下位面)



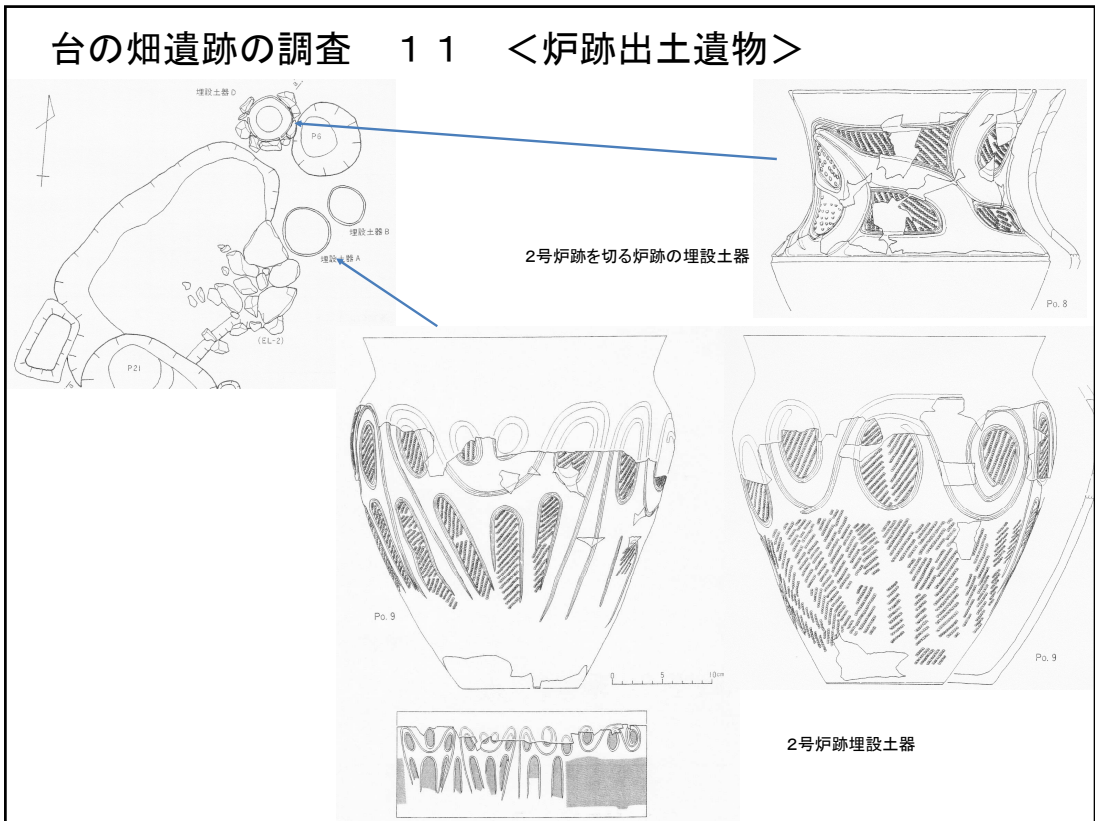
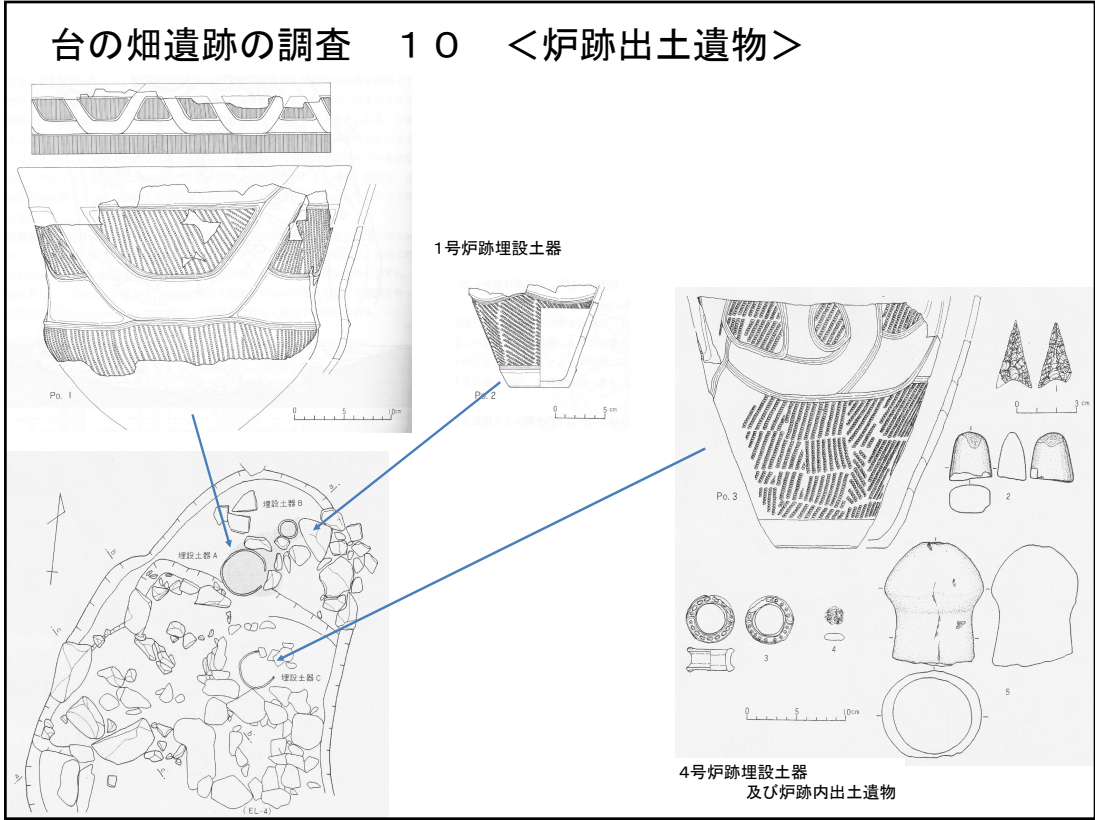
4号炉跡埋設土器周辺の敷石



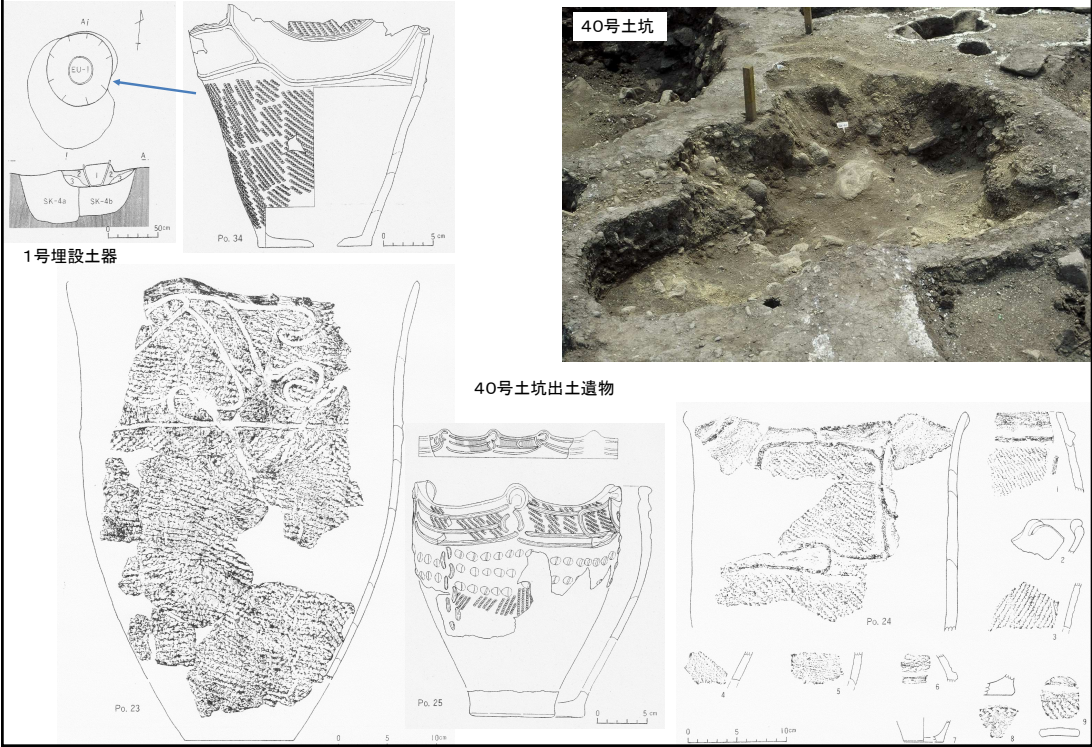
1号集石遺構



2号集石遺構



台の畑遺跡の調査 1 2 <埋設土器、土坑出土遺物>



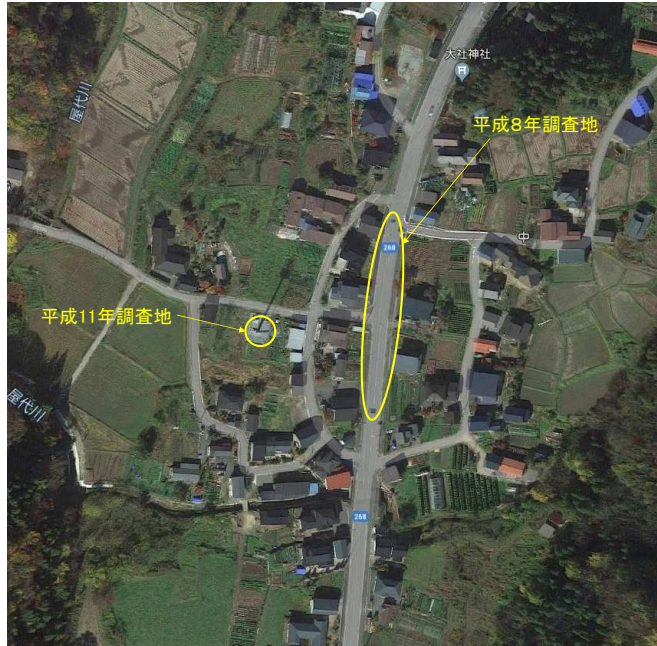
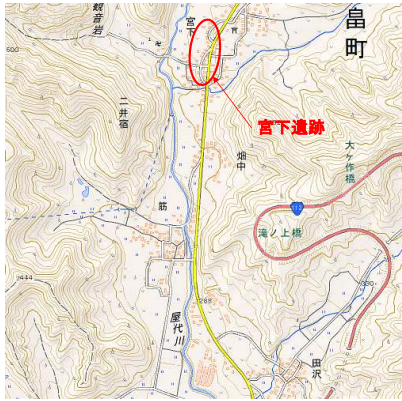
台の畑遺跡の調査 1 3



宮下(ミヤツ)遺跡の概要

◆屋代川と脚沢川の交流点の段丘上に位置

◆当該地では、昭和の初期頃より土地所有者である故高梨次郎左衛門氏により、開墾または畑耕作時において掘り出された土器や石器が収集され、今日に至るまで大切に保管されている



宮下遺跡(上空より)

◆平成8年、県道改良工事に伴い山形県埋蔵文化財センターが主体となり緊急発掘調査を実施。調査成果は次のとおり。

[時期] 縄文時代中期末葉

[遺構] 竪穴住居跡3棟、土抗22基、埋設土器13基など

[遺物] 縄文土器(深鉢、浅鉢、注口土器、台付鉢、小型土器)、土鈴、円板状土製品など
石鏃、石錐、石匙、石篋、搔器、削器、不定形石器、磨製石斧、凹石、石皿、石棒など

◆平成11年、無線基地局建設に伴う緊急発掘調査を高島町教育委員会が実施。

[時期] 縄文時代中期末葉

[遺構] 竪穴住居跡1棟、土抗13基、埋設土器1基など

[遺物] 縄文土器、石鏃、不定形石器など



宮下遺跡遠景(東より)

宮下遺跡の平成8年度調査 1



調査区全景(北から)



住居跡検出状況



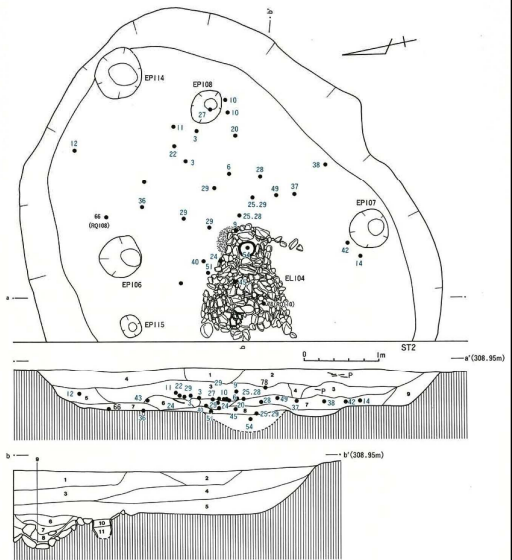
遺構精査状況



2号住居跡遺物出土状況

宮下遺跡の平成8年度調査 2 < 2号住居跡 >

104号炉跡完掘状況



◆2号住居跡

西側が調査区外のため未確認だが、長軸5.7m、短軸4.6m以上の規模を有する。

壁は緩やかに立ち上がり壁高50cm。床面はほぼ平坦。

柱穴はP106、P107、P108が想定される。

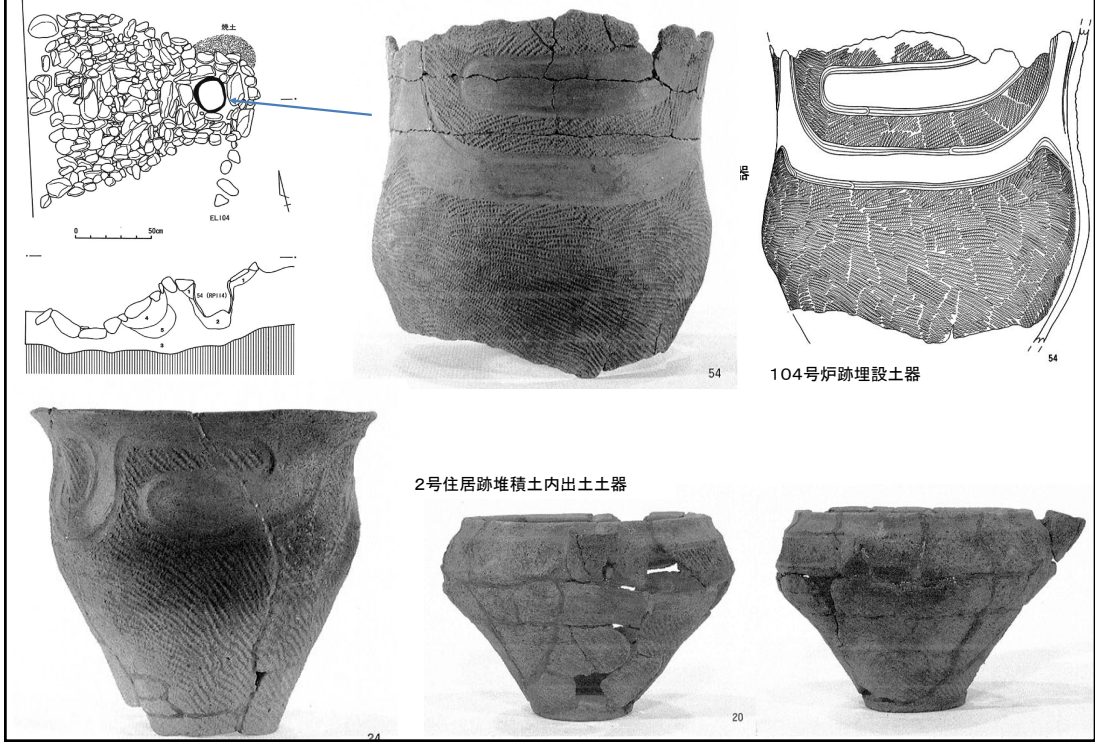
確認した範囲では遺構の重複、切り合いはない。

炉(104号炉跡)は土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉で、前庭部が調査区外となる。

土器埋設部に石組部、前庭部が馬蹄形状に連なる平明形を呈するものと考えられる。

埋置される土器は胴部だけの1個体である。

宮司遺跡の平成8年度調査 3 <出土遺物>



宮下遺跡の平成11年度調査 1



宮下遺跡の平成11年度調査 2



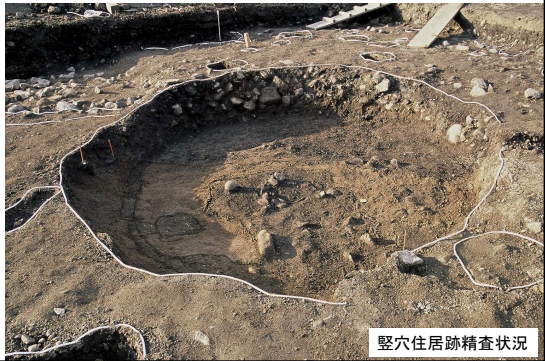
埋設土器確認状況



埋設土器精査状況



竪穴住居跡精査状況



竪穴住居跡精査状況

宮下遺跡の平成11年度調査 3



降雪後の調査地近景(北より)



炉跡精査状況



炉跡精査状況



炉跡精査状況

宮下遺跡の平成11年度調査 4



竪穴住居跡完掘状況



炉跡埋設土器精査状況

埋設土器の左側に縄文土器が確認される。これは本炉跡構築前に所在した炉の埋設土器と考えられ、炉の作り替えが行われたと思われる。

◆竪穴住居跡

平面形は長軸4.2m、短軸3.6mを測る楕円形状を呈する。

壁は比較的急角度で立ち上がり、上半部で緩やかになる。壁高は一部で50cmを測る。床面はほぼ平坦。

ピットは確認されたものが4基で、いずれも本住居跡に関わるものと考えられる。炉の中軸線上に1基、炉の中軸線を対称線として埋設土器と石組部の接合部の両側に2基所在する。この柱間は2mを測る。この他前庭部中央、中軸線上に1基確認された。

炉が設置される側にもみ幅10cm程の周溝が認められた。

炉は土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉で、長さ185cm、幅88cmを測る。

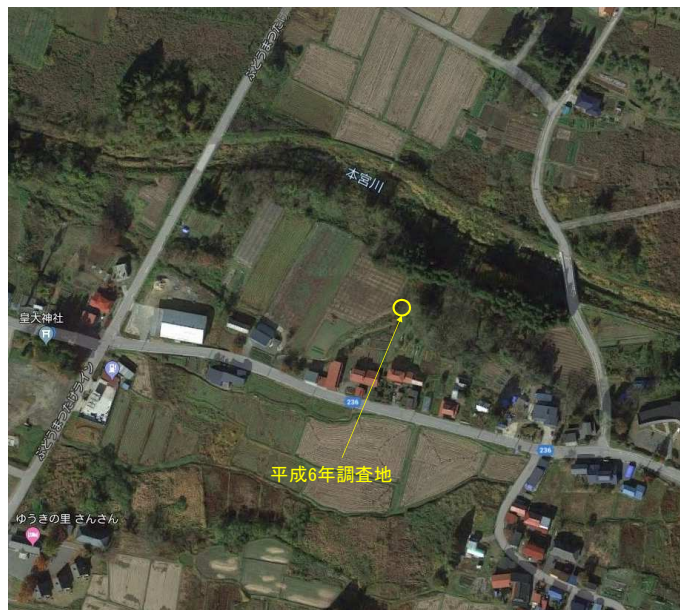
土器埋設部に埋置される土器は1個体で、土器周辺幅20cmの範囲に石囲い、それに接続して断面形箱形を呈する石組部が接続する。石組部底面に敷石は認められない。石組部に連続して前庭部の袖石が置かれる。石組部から前庭部の平面形は長方形(短冊形)を呈する。

金谷A(かやA)遺跡の概要

◆当該地区は、「七色畑」「下り川」などと呼ばれ、少なくとも昭和初期から地元ではよく知られた遺物散布地である。当時採集された遺物には「七色畑」「下り川」「金谷」等々の記載があるものが多数あり、いずれも同一の遺跡を指すものと考えられる。

◆本宮川の左岸段丘上に位置

◆東側に金谷B遺跡(縄文前期・後期)所在



金谷A遺跡(上空より)

◆平成8年、本遺跡の東側に新たに遺跡が発見されたため、本遺跡を金谷A遺跡、新規発見遺跡を金谷B遺跡とした。

◆本遺跡は平成6年、遺跡範囲確認調査を実施。

[時期] 縄文時代中期末葉～後期前葉

[遺構] 竪穴住居跡3棟(+1棟:プランの一部のみ確認)

[遺物] 縄文土器(深鉢、ミニチュア土器など)、耳栓、土錘、円板状土製品
石鏃、石匙、石錘、不定形石器、石皿、石棒

※調査区が狭小であったわりには出土遺物は多量である

※出土遺物の大半は縄文土器で、石器は極めて少ない



金谷A遺跡遠景(南より)

金谷A遺跡の調査 1



調査地近景



調査開始時の遺物出土状況



竪穴住居跡プラン確認状況



調査区拡張後の竪穴住居跡精査状況

金谷A遺跡の調査 2



竪穴十強後精査状況



重なって確認された石組炉



炉跡プラン確認状況



炉跡精査状況

金谷A遺跡の調査 3



炉跡完掘状況



遺物出土状況(ST-2a)

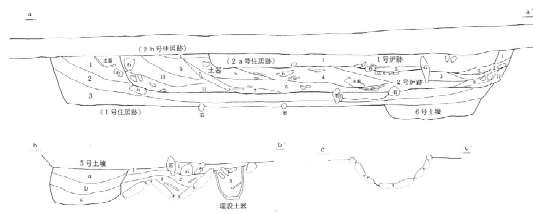
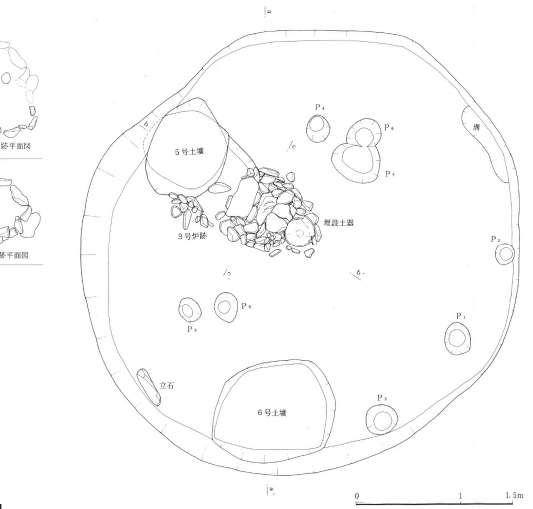


遺物出土状況(ST-2b)



遺物出土状況(ST-1)

金谷A遺跡の調査 4



◆ 竪穴住居跡

プラン確認後、精査の段階で石組炉を2基確認。精査中の出土遺物や土層の観察から3棟の竪穴住居が重複して所在することを確認。規模はそれぞれ2a号：長軸3m、短軸2.4m、2b号：長軸4m、短軸3.4m、1号：4～4.45mを測る概略円形状を呈する。

壁は比較的急角度で立ち上がり、床面はほぼ平坦。

ピットは確認されたものが8基。炉の中軸線上に1基、炉の中軸線を対称線として石組部の埋設土器寄りの端部両側及び炉の中軸線上の柱穴の両側に2基、計5個の柱よりなる。柱間は2mを測る。周溝は確認できない。

炉は土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉で、前庭部が土坑により切られるが長さ190cm、幅80cmを測る。

土器埋設部に埋置される土器は1個体で、土器周辺幅20cmの範囲に石囲い、石組部が接続する。炉の軸線上の石組には大きな石が用いられる。石組部から前庭部の平面形は長方形(短冊形)を呈する。

遺物出土状況(ST-1)

日向洞窟(ヒナトウツ)遺跡・西地区の概要

◆日向洞窟は、我が国を代表する縄文時代草創期遺跡の一つであり、昭和52年国指定史跡として指定されている。日向洞窟(第1洞窟)の西150mの地区に町道改良工事が計画されたため実施した昭和63年の第2次調査により縄文時代中期、早期、草創期の住居跡をそれぞれ1棟確認した。



縄文時代中期の竪穴住居跡検出地近景(奥の岩場が日向洞窟)

日向洞窟遺跡(上空より)

日向洞窟遺跡・西地区の調査 1



複式炉が検出された地区の近景



竪穴住居跡精査状況



炉跡検出状況



竪穴住居跡が確認された箇所の土層断面

日向洞窟遺跡・西地区の調査 2

